ASKばんこくからの駐在員報告 Vol.3

愛知商工連盟協同組合 国際事業部海外開発部長　福田 譲

晩秋の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のことと心よりお喜び申し上げます。

改まったご挨拶に時候をしたためながら近況を報告しあうのは、四季を敬う日本人ならではの風習かとも思われますが、日本の四季の美しさは世界も認める風物のひとつでもあります。こちらタイでも近年は日本への旅行が大人気です。日本の景色、文化、食べ物を楽しみたいというのが大方の目的のようですが、それらの魅力はみな四季の影響を抜きには語れません。では、タイの季節はどうかと言いますと、四季ではなく、タイには俗に三季があると言われています。『暑い』『すごく暑い』『ものすごく暑い』。これはよく耳にする冗談ですが、正確には『暑季』『雨季』『乾季』と言われています。日本のような四季は存在しませんが、タイや他の東南アジア諸国には観光客を引き付けて止まない魅力があるのはご存知の通りです。

先日、国連世界観光機関（UNWTO）が発表した2016年の国際観光調査では、タイの観光収入は世界3位。世界の地域でもタイを含めた東南アジア地域の前年比増は目覚ましく、特にベトナム、インドネシア、フィリピンの成長が顕著だとか。では、その東南アジアの地域が持つ魅力とは一体、何なのでしょうか？ある国に感銘を受けた外国人たちの旅行記がヒントになるかもしれません。

『彼らの無邪気、率直な親切、むきだしだが不快ではない好奇心、自分で楽しんだり、人を楽しませようとする愉快な意志は、われわれを気持ちよくした。一方、夫人の美しい作法や陽気さには魅力があった。さらに、通りがかりに休もうとする外国人はほとんど例外なく歓迎され、『おはよう』という気持ちのよい挨拶を受けた。この挨拶は道で会う人、野良で働く人、あるいは村人からたえずうけるものだった』。

では、この旅行記に登場する人たちは何人（なにじん）でしょうか？

正解は日本人です。幕末から明治初期に日本を訪れた欧米の宣教師や外交関係者、技術指導を担ったお雇い外国人たちの目に映った当時の日本人の姿です。急進的な進歩を正義とし、激変する社会を生きていた欧米人にとり、情緒豊かに天真爛漫に生きていた当時の日本人は、まるで妖精の国に生きる民だとも表現されていました。常に時間に追われながらあくせく働いているイメージの強い現代の日本人からは想像し難い光景です。

そして、当時の日本について欧米人たちが語った内容は、今、私たちが東南アジアの地に足を踏み入れて抱く印象とどこか似ています。タイは“微笑みの国タイランド”などと称されますが、この微笑みはタイのみならず、東南アジアの国々に共通する特徴です。彼らの人懐こく、慎み深い微笑みに癒されたことのある方も多いのではないでしょうか。十数年前の話となりますが、地方都市へ移動の最中に、電車の中で出会ったばかりのタイ人から、自分が食べようと用意してあったお弁当やミカンをごそのあげく見ず知らずの日本人を実家に招待してくれようとまで。そんな彼らと接していると、彼らのなんとも慈悲深く慈愛に満ちた存在に、己の狭量さとを対比させながら、人としての本質的な豊かさにおいて、まるで別次元の世界に属するかのような彼らの純真さに胸を打たれずにはいられませんでした。

残念ながら、外国人の彼らがこの世の桃源郷とまで称した在りし日の日本は、急速な近代化に伴い、それを追うかのように、姿を消してしまいました。既に大正期にはその面影は消え失せていたと証言されていますから、1853年に黒船が浦賀に到着した時期を幕末期の始まりとするならば、明治期の終わりの1912年まで、少なくともこの60年の間に日本の姿は一変したということになります。当時の日本は明治維新により国体が刷新され、欧米を猛追する勢いで近代化を進めました。但し、近代化を模倣すべき欧米諸国が存在したとは言え、当時の世界は経済、政治、社会、文化においても現代とは比べものにならに程に未成熟な状態でした。対して、その当時の状況から、あらゆる分野で近代化が成熟し、文明の行き止まりとも思しき現代において、これまで人類が到達した文明の経験値を模倣し、活用できる立場にある東南アジアの国々が自国の近代化を遂げるのに、当時の日本が要した歳月を等しく要するでしょうか。勿論、近代化に関してはそれに至る道程を説明する統一理論は未だ準備されてはいません。寧ろ、各国の開発・発展には多様性を認めるというのが近年の近代化論においては優勢な立場です。とは言え、東南アジアの国々がたどろうとする近代化の方向性に違いは認めても、その変化の速度は過去に近代化に挑んだ国々と比較して、圧倒的に速いであろうということは想像に難くありません。

新興国には依然、社会体制の中に、国民の富の収奪を可能とするシステムの存続を願う特権層が存在するのも事実です。現代の国際社会では、かつて西欧の国が成し遂げた流血による民主革命は容認されません。又、仮に武力に訴えた革命にしても、善良なる市民による、近代兵器を備えた専制国家の転覆は、相対的により困難な時代とも思われます。従って、現代の新興国が近代化を遂げるには、適切な時間とより一層の英知が求められる状況というのも確かです。但し、世界の地域と国々による接続性が発展したグローバル化の時代において、特に東南アジアの国々の開放的な国策は、教育の普及、世界の最新のテクノロジーへのアクセスを促し、その相乗効果による中間層の台頭は必然の帰結です。アセアン諸国の中の6か国（ベトナム、シンガポール、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア）における所謂、年間の可処分所得がUSD5000～3500と定義される中間層の数は、2015年から2030年へかけて、8100万世帯から1億2600万世帯へと急増する見込みです。（出所：Euromonitor ちなみに日本の中間層世帯数5300万/2015年）近代化の原動力を担うとされる中間層の台頭は、現代社会で認められた民主的な手続きによる、創造的破壊を妨げない真の技術革新を促す政治体制を確立する可能性を秘めています。かつての日本を訪れた欧米人が、既に失われし彼らにとっての遠い原風景を日本に重ね、外国人の彼らだからこそ、その価値に気付き、守りたかった日本の文明が、彼らの使命たる日本の近代化によって失われてしまったことは皮肉なものです。そして更に皮肉と言えるのは、日本の近代化の当事者たる日本人が、欧米人が感じていた日本の魅力を過少に評価していたという事実です。物質的な近代化に突き進む当時の日本において、先進的と呼ばれる日本人ほど、欧米人が称賛する日本の美徳を、むしろ未開で卑俗なものと否定する傾向にあったとも言います。日本国内おいても、海外においても新興国と関わる機会の多い今、この過去の記述が私たちに教えてくれることは、物質的な進歩や発展という一義的な価値観に囚われるのではなく、その国の自尊心を肯定しながら、その国の歴史や伝統に則した複合的な発展を祝福する態度なのかもしれません。

多くの人達を魅了してやまない東南アジアの国々に、在りし日本の面影を重ねる喜びと、経済発展著しい東南アジアの国々に、逝きし日本の面影を重ねる憂いとを感じながら、変化の避けられないこの時代に、出来ることなら去り近かないで欲しい東南アジアの面影を思慕しつつ、この地域の豊かな近代化を願ってやみません。

ASK Monthly 通信 Vol. 38　2017年 11月号
編集・発行 / 愛知商工連盟協同組合　〒461-0040 愛知県名古屋市東区矢田 1-3-11

ノイシェバンシュタイン城
（独バイエルン州）by 原田さえ

深秋のみぎり　皆様には益々ご隆盛のこととお慶び申し上げます

先月の稀にみる大型台風襲来時の総選挙開票については、マスコミの予測通りの結果となりいささか拍子抜けの感もありましたが、主権者たる国民から離れたところで繰り広げられた野党の混乱ぶりを見れば当然の結果と納得せざるを得ません。しかし社会保障改革、少子化問題（労働力不足）、20年（オリンピック）以降の景気対策、悪化する財政再建については与野党ともに具体的な政策に触れていません。

隣国中国は党大会において2035年までに「社会主義の現代化」を実現し、2049年（建国100周年）には総合的な国力や国際的な影響力を高めた「社会主義現代化強国」を実現すると宣言しました。現実に経済成長率は常に前年を上回る伸びを見せており、その背景として習総裁は「国内消費の高い伸び」と「消費の対象がモノから、雇用を生み出しやすいサービスに代わりつつある為、雇用の安定がある」との見方を挙げています。日本の識者も中国本土は高度成長を続けつつ、その成長の質も改善、高度化しつつあるとみており、さらにこうした経済を「一帯一路構想」と呼ぶ国際インフラ開発へのコミット、世界への各種消費財輸出へのコミットにより、さらに加速化していく可能性もあり、中国経済の動きは今後注目していく必要性があると論評しています。私も度々中国に訪れますが、そのたびに急速に進化する街並み、人々の顔相の明るさ、あふれる商品、道路に溢れる高級車等を見るにつけ、帰国してからの我が国の街の静けさに愕然とすることがあります。

残念ながら我が国の与野党ともに、中長期的な経済施策を打ち出していなく目指すべく将来像も見えません。安定的な議席数を与えられた与党にはぜひ大衆迎合的な施策ではなく、一時的には国民に苦労を強いても将来を描ける政策を進めていただき、野党もその政策に勝るとも劣らない国民の将来の為の対案を示し論争を繰り広げていただきたいと今回の残念な選挙戦を振り返り、切に思う次第です。

愛知商工連盟協同組合
代表理事　鹿島 均

SOUND OPINION 「小宮一慶の日経新聞最大活用術」

著者　小宮一慶
日本経済新聞出版社

大切なのは 給与の源泉である「名目GDP」

P86

GDPには、「名目」と「実質」の2種類があります。「名目」は実際の金額を表し、「実質」はインフレやデフレを2005年の貨幣価値を基準として調整した後の金額です。数年前まではデフレが続いてきましたから、名目GDPより実質GDPのほうが小さくなります。

特に大切なのは、名目GDPです。なぜかというと、名目GDPは私たちの給料の源だからです。現在、名目GDPのうち約70％が私たちの給与として支払われています。つまり、働く人1人あたりの名目GDPが伸びない限り、私たちの給料は伸びないというわけです。

もう一つ、名目GDPが大切である理由があります。それは、多くの経済の指標が名目GDP比率で計算されているということです。一番わかりやすいのは、政府債務残高です。日本の政府債務残高は、今や一千兆円を超える規模にまで膨らんでいます。これは名目GDPと比べると200％を超えており、世界でも最悪基準です。

ちなみに米国は、年間1兆ドルを超える財政赤字を抱えていることが大きな問題となっていましたが、対名目GDP比で考えると、その残高は110％程度です。財政が破綻した当時のギリシャの債務残高は、同比170％程度。先進国で日本に次いで2番目に財政赤字が大きいイタリアですらも、同比140％くらいです。日本の財政赤字がどれほど大きいか、お分かりになるでしょう。

このように、各国の経済規模を考慮して比較したい場合は、名目GDPを基準にするとすごく分かりやすいのです。その国の経済規模を表す典型的な指標だからです。

日本のGDPは、約491兆円（2014年度）です。ドルベースですと、為替レートにもよりますが、約4・1兆ドルです。（1ドル＝120円で計算）。ちなみに、世界1位の米国は約17兆ドル、2位の中国は約10兆ドルです。日本のGDPは、ざっくり500兆円と覚えておいてかまわないでしょう。

もう一つ、GDPに関連して知っておいて欲しいことがあります。それは、現在（15年4－6月期）のGDPは、バブル崩壊直後の1991年度とほぼ同じ水準（約480兆円）だということです。つまり、バブル崩壊以降、この23年間、日本のGDPは伸びていないのです。

その間、米国のGDPは約2倍伸びました。中国に至っては、10倍も伸びたのです。日本の経済がいかに停滞しているかしっかり認識しておかなければなりません。